

全国棚田(千枚田)連絡協議会

棚田ライタラス

第36号 2004.12.15

(季刊・年4回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきやらネットワーク

〒169-0073 東京都新宿区百人町1-23-29-202

TEL 03-5389-9937/FAX 03-5389-0078

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>



第10回全国棚田サミット
佐賀県相知町蕨野棚田 8.5mの石垣を歩く参加者

「サミットが終わって」

佐賀県知事

古川 康

康

第10回全国棚田「千枚田」サミットが終わった。いい天気の下、大勢の方に参加していただくことができた。ほっとした。なんせあの前も後も「台風だらけ」だったからだ。

いろんなことを自慢したいけれど、あれだけのことをこれだけの地域がやったという自信が何よりの財産だと思う。

大昔、ポートピア博覧会というのがあった。自治体博覧会のはしりだ。終わったあと神戸市役所に行って、何が地域に残りましたか、とたずねたところ、「親戚を泊めるために買ったふとんが残りました」と笑いながら答えてくれたことがあったが、この佐賀県東松浦郡相知町にはいいサミットができるという誇りが満ち満ちている。棚田ということでこれだけの方に集まっていたとき、喜んでいただけることを知ったことも大きかったと思う。

残ったのはそれだけではない。具体的なものもある。「棚田からぼたもち」がそうだ。相知町蕨野の棚田のお米(夢しずく)を水車で挽いて、それをお団子にしてあんこやきなこをつけて食べる。題して「棚田からぼたもち」。これが「しつこなくて大きさもちょうどよくておいしい」と評判を取っているのだ。

いい名前でしょ? しかも中身もグッド。よいこの皆さん、どうかマネしないでね。

サミット in 佐賀県相知町

おうちちよう

2004年9月3日(金)
～9月4日(土)開催



特別講演、佐賀県知事古川康氏。気さくな話しぶりと自らの経験を元にした、「棚田」的なものを生かす地域づくりの話に聴衆は引き込まれた



文化交流センターで理事会、総会を終えたあと、社会体育館で盛大に開会式が開幕した



メイン会場となった相知町交流文化センターの入り口に立てられたモニュメント

暑さ残る9月3～4日に

佐賀県相知町で第10回全国
棚田(千枚田)サミットが

開催された。相知町のみなさんのおたたかな心づくしが随所に感じられたサミットであった。約900人を超える人が参集し、会場には人があふれ、熱気に満ちた暑い2日間となつた。

—首長等会議

1日目は、全国棚田(千枚田)連絡協議会理事会及び総会が行われたあと、首長等会議が引き続き行われた。ここでは平成17年度以降の「中山間地域等直接支払制度」の存続について議論が展開し、いま一度、連絡協議会として要請行動をやろう!と合意。そして、全国棚田サミットが、国や県、世論を動かしていることを確認した。

—特別講演

佐賀県知事、古川康氏による講演「人の手から手へ、未来に活かす『棚田』」では、知事自らの棚田や農村との出会いからはじまり、地域の「棚田」的なものを活かし、豊かな地域づくりをしていくことを提案。そし

て佐賀県の取り組みとして
「22世紀に残す佐賀県遺産」

や「オンラインの佐賀体験活動支援事業」などを紹介し、各地域への大きな刺激となつた。

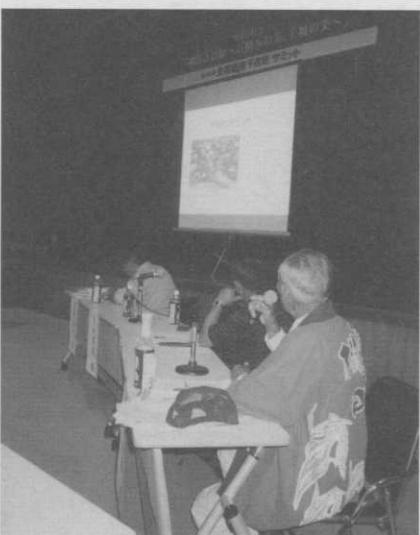
蕨野棚田ミニウォーク

棚田サミットに欠かせないのが、ご当地棚田の見学巡り。約40haに広がる蕨野棚田ミニウォークでは、地元ボランティア解説者の話の巧みさにはじめり、棚田のなかでのオカリナとギターによる生演奏、8.5mの高さを誇る石垣の上を歩くなど趣向が凝らされてあつた。

◎

そのほか、会場には第1回全国棚田サミット～10回までのポスターが展示されていたほか、子どもの絵や棚田の写真なども数多く展示されていた。交流会でも「蕨野浮流」といった地元芸能を披露。食事も地元の産物が並び、また交流会後、会場外に出れば、巨大な氣球とサッカスの生演奏による送り出しなど、素敵な企画がちりばめられていた。多くの人が心あたたまるもてなしに大いに盛り上がり、充実した2日間となつた。

第10回全国棚田(千枚田)



上:各分科会では、多彩な話題提供者による事例報告などが行われ、充実した時間となった。写真は第4分科会
左:相知小学校5年生による「田んぼの学校報告」から。
オリジナルの「たなだのうた」を披露してくれた

参加者 Voice

次代につなごう棚田の大切さ

全国農業協同組合中央会

米沢 良正

私が全国棚田サミットに参加するのは、第6回福岡県星野村・浮羽町から毎年、佐賀県相知町が5回めです。今回もまた全国各地から参加した人たちといつしょに、2日間にわたりたくさんのこと学びました。

第1日は、佐賀県の古川康知事の講演に引き続き、蕨野の棚田ウォークリング。蕨野の棚田は、八幡岳の斜面に1050枚、40haが広がり、日本で一番高い8.5mの石積みがあります。

稻穂が揺れ、柔らかな曲線が連なる畦を歩くと、都会の喧騒を忘れて、心が和みます。ところが、日本一高い石積みの田の畦を歩いたときには、足がすくんでしまいました。稻穂が垂れて、いつそう狭く感じる畦を歩きながら下を見ると、あまりの高さに足が前に進みません。引き返すわけにもいかず、やつとの思いで渡って振り返って見ると、その高いこと。先人の石積みの苦労と、それを今も引き継いで耕す人たちの努力を思いながら、カメラのシャッターを何回も切りました。

私は、JAグループの広報の仕事をしています。農業の役割を説明するときは、多面的機能の象徴として棚田のことを取り上げます。学校で子どもたちに農業のことを話すときには、これまでに棚田サミットで撮った写真を持って行きます。写真を見せながら、棚田はお米を作る以

外にも、洪水を防ぐこと、鳥や虫など生き物の住み家として生態系を保っていること、人の心にやすらぎを与えることなど、さまざまな役割をしていることを説明します。蕨野の棚田の写真も、子どもたちに見せて、その大きさを伝えたいと思います。

夜の交流会は、顔見知りの人もいて、おいしい地元の料理と地酒をいただきながら、楽しいひとときでした。2日目は、分科会、事例発表、分科会報告等があつて、最後に共同宣言があつて終了しましたが、親切にしていただいた延べ250人260のボランティアのみなさんに感謝します。

今年で10回目を数える棚田サミット。これまでに、棚田オーナー制度、日本棚田百選、棚田ブランド米、中山間地域等直接支払制度など、棚田の保全と活用に大きな役割を果たしてきました。しかし、今回も議論になつた中山間地域等直接支払制度の見直しや深刻な高齢化問題など課題は少なくありません。

とはいえ、日本は食料の6割を海外に頼っているが、棚田のような日本の原風景は輸入することはできないのです。この貴重な棚田を次代に引き継いでいくために、みんなの知恵と体験を交流する全国棚田サミットがますます充実することを願っています。

分科会②

棚田米の販売戦略を考える

◆コーディネーター：横川 洋さん（九州大学大学院教授）
◆話題提供者：平岡 豊さん（マーケティング・プロデューサー）
西島豊造さん（㈱スズ代表取締役社長 米のソムリエ）

棚田米をマーケティング

主に3つの提案が出た。1つは、商品としての棚田米のアピールポイントをつくることの必要性。お米チャートなどで特徴を明確にし、産地のこだわりを具体的に表現することが求められた。2つめは、棚田百選の地区がリーダー的役割を果たし、産業基盤としての棚田を全体に底上げすべきと提案。3つめは、連絡協議会で「棚田米」認定シールをつくり、ほかとの差別化の提案など、棚田米のPRとさらなる質の向上が求められた。

分科会①

棚田サミットの10年～サミットの軌跡と展望～

◆コーディネーター：中島峰広さん（早稲田大学名誉教授）
◆話題提供者：石田三示さん（NPO法人大山千枚田保存会理事長）
藤 寛さん（佐賀県公安委員会委員長 元西有田町長）
田中卓二さん（国土交通省北海道局農林水産課）

サミットとともに発展した保全

サミットを草創期（1～3回目）、充実期（4～7回目）、発展期（8～10回目）に分け、サミットとともに棚田保全の活動が展開してきたことが確認された。千葉県鴨川市大山千枚田保存会の石田氏からも、現在はオーナー制度が定着し、市の委託事業等を請け負うなどサミットとともに発展してきたさまが報告。都市住民と手を結んで保全活動を進めることの重要性が提案され、今後10年が大切と強調された。

分科会レポート

今年のサミットの分科会は5つ。5会場に分かれ、それぞれ約80～150人ほどが参加した。



分科会発表にて。
各分科会のコーディネーターが報告及びディスカッションを行った

分科会⑤

棚田発・農業観の転換

◆コーディネーター：宇根 豊さん（NPO法人農と自然の研究所代表理事）
◆話題提供者：山下惣一さん（農民作家）

農業は手段から目的に いまこそ、棚田から転換を！

かつて農業は生きるために手段だったが、現代は、国民に食料を供給するといった産業という目的になってしまつていると苦言。けれど、棚田がこの農業觀を転じると提唱した。農業の多面的機能も農家にとってはあたりまえのこと。農業を産業として見るため、お金にならないことをしなくなつたが、絶滅危惧種の3分の1は田んぼの周りの生きもの。時代の価値觀を変えるべき。いま、棚田保全の活動から変わり始めていると強調された。

分科会④

棚田と景観～石積みの美、土坡の美～

◆コーディネーター：千賀裕太郎さん（東京農工大学教授）
◆話題提供者：宮坂卓也さん（㈱TEM研究所取締役）
永田博義さん（写真家）
百武弘之さん（地元建設業者）
百武正勝さん（地元農家 石積み名人）

石積みなど景観美の謎を探る

写真家永田氏による石積みと土坡の棚田、約50点の写真紹介を皮切りに、土坡の事例研究として、宮坂氏から輪島市白米千枚田の産業史と景観の変遷が語られた。さらに、地元蕨野棚田保存会の2人からは、石積み復旧や石積みの構造、また石積みのつき方といった指南が報告された。そこから棚田は、構造的にも文化的にも、歴史的にも多様なものであり、こうした魅力を地元で掘り起こし、保全に反映できないかと提案がなされた。

分科会③

棚田での資源循環型農業とフィールド教育

◆コーディネーター：田中欽二さん（佐賀大学教授）
◆話題提供者：津野幸人さん（鳥取大学名誉教授）
武富勝彦さん（農業会議員代表「モダナ農業塾」講師）
八尋幸隆さん（百姓「農と旬を語ろう会」主宰）
五十嵐勉さん（佐賀大学農学部助教授）

佐賀大の取り組みと有機の試み

話題提供者たちそれが、有機農業に取り組み、この分野で金メダル級の人々であることが紹介。佐賀大学の学生たちによる「手間講隊」をはじめ、自然農法などの活動紹介がなされた。そして、ほんものを食べていくことの大切さ、一粒の米にもいのちを込めてつくるような農業のあり方の必要性が提唱。棚田を安全な食料生産の場として再評価し、有機農業や自然農法による棚田づくりに今後の可能性があると示唆した。

参加者 Voice

佐賀県知事の講演から小学生の発表まで

愛知県農林水産部農地整備課

布目 貴秀

9月3日、私自身初の九州上陸ということに、かなり興奮気味で博多にたどり着いた。しかし、とりわけ名古屋と変わることのない町並みに少し期待はずれな気分になりながら相知町への直通バスに乗り込んだ。

相知町に着くと早速佐賀県知事の特別講演、あまりの話し上手にビックリした。「棚田的なもの」を探すには自分自身に心の余裕がないとできないと感じながら聞き入った。

さて、いよいよ楽しみにしていた棚田ウォーク。班毎に分かれて蕨野の棚田にGO! 地区のボランティアのガイドさんの楽しい話を聞きながらバスで移動、地区の皆さんのが総出で歓迎してくれることがとてもうれしかった。

ガスがかかっていて抜けれるような青空ではなかつたけれど、展望台からの景色は絶景だった。田んぼの一枚一枚の区画は来年棚田サミットが開催される愛知県鳳来町の棚田より大きく見えた。見わたす限りの棚田に圧倒されながら名残惜しい気持ちを抑えてミニウォークのコースへ移動した。

バスを降りた所には何もなかった、でもしばらく歩くと山あいに響く音…「何の音だろう? テープでも流しているのだろうか?」と思っていると、なんとつ!

小学生たちの発表会を見て、この会を契機にして自分の故郷に誇りを持てるようになれば最高だと感じた。

オカリナとギターの生演奏。しばらく聞き入りながら田んぼの中を散策、選曲が良いのか音色が良いのかわからないが何とも落ち着く。ものすごく癒されていく、どんどんどんどん癒されていく。真っ白な気持ちになつて見上げた日本最大の石積に圧倒されながら、この石積みを作つてきた先人の業績に感動した。

この生演奏の演出は最高だった。いつまでもここで「ぼや~つ」とぶらぶらしていたかつたけれども時間がきてしまつた。また、ここに来たいと強く感じながら棚田を後にした。

分科会では活発な意見交換がなされた。蕨野の棚田に日本一の高低差のある石積があるということは、少しでも区画を大きくして、少しでも農作業を効率的にするため工夫してきた結果だと思う。当然このように工夫することは現在にも引き継がれており、農作業のさらなる効率化は自然の流れだと思う。棚田の景観を保存することは重要なことだが、棚田はテーマパークではなく第一に作物の生産の場となつてているので、畦畔を歩きやすいようにコンクリート打設するような現代版の効率化も受け入れなければならない

協議会の活動に心ばかりのエールを送っていたが、やはり実際にいろいろな人の話を聞き、棚田を歩き、五感で感じるこの重要性を痛感させられた今回のサミットだった。

総会では、予想どおり本協議会の活動がその創設に大きく貢献した中山間地域等直接支払制度の存続問題に話題が集中した。国の財政制度審議会から本制度について原則として廃止を含め見直すべきとの答申があつただけに心配もひとしおであった。幸いにして農林水産省は本制度に対する関係市町村や対象集落の代表者の意見、第三者機関による検証結果等を踏まえ、来年度予算の概算要求に制度継続を盛り込んだ。また、最近の新聞情報では財務省も本制度の継続に合意したことであり、まずはひと安心と言つたところか。

参加者 Voice

棚田サミットに初めて参加して

全国町村会・全国棚田(千枚田)連絡協議会個人正会員

牛島 正美

10回目にして、やっと棚田サミットに参加できた。協議会発足以来の個人会員であるが、ちょうど10年前、平成6年12月の全国町村長大会の日に高知県梼原町の中越町長の呼びかけのもとに開催された全国棚田(千枚田)連絡協議会の準備会合に参加して以来があるので、サミットは初めての参加となつた。

今回は、福岡県の実家への介護支援帰省を兼ね、佐賀県相知町でのサミットの会期に合わせ夏休みを取つた。

これまで、会報の「ライステラス」や

サミットの報告書を読み、年々充実する

協議会の活動に心ばかりのエールを送つていたが、やはり実際にいろいろな人の話を聞き、棚田を歩き、五感で感じるこの重要性を痛感させられた今回のサミットだった。

総会では、予想どおり本協議会の活動がその創設に大きく貢献した中山間地域等直接支払制度の存続問題に話題が集中した。国の財政制度審議会から本制度について原則として廃止を含め見直すべきとの答申があつただけに心配もひとしおであった。幸いにして農林水産省は本制度

を踏まえ、来年度予算の概算要求に制度

継続を盛り込んだ。また、最近の新聞情

報では財務省も本制度の継続に合意した

ことがあり、まずはひと安心と言つたところか。

しかしながら、棚田耕作農家のほとんどは70歳前後である。高い石垣が連なる相知町の蕨野の棚田でも、農家の方が「トラクターに乗るのは命懸けだ。乗れてもあと5年ぐらいだ。」と言っていた。直接支払制度が集落協定をベースとした助成であるため、話し合いにより将来にわたる耕作の担い手を明確化した集落もあるが、そうでない集落も多い。集落あるいは集落を超えて、耕作継続の仕組みをいかに作つていくかが今後の5年の大きな課題であり、棚田保全にとってのリストチャンスかもしれない。

そこで、棚田保全のため、元気な定年退職者をボランティアとして棚田のある市町村に派遣するシステムができるのか。NPO法人地球緑化センターは、これまで10年間に300人近い若人を「緑のふるさと協力隊」として山村の町村に派遣し、森林管理や農業分野で活躍してもらっている。1年間の派遣後4割の人がその地域に定住しているという。60代の人からは、「この制度のシルバー版を作つてもらいたい」との声も強い。

また、NPO法人ふるさと回帰支援センターは、自然豊かな地方暮らしを希望する都市の定年退職者等のニーズに積極的に対応しようとしている。

多くの人は、ボランティア精神旺盛で、大義名分と受け皿があればといふ。会員市町村を含め各団体、NPO等の有機的な連携が必要だ。

第10回全国棚田サミット印象

全国水土里ネット 大橋 巧

棚田、この言葉をしばしば聞くようになったのはいつからであろうか。私は、

北原白秋にも詩われた筑後平野、山門の生まれである。東方には清水山山系が横たわるが、残りの3方は平野が広がっていく。小学5年生の初秋、清水山に関心を持ち、友達と2人で自転車で東に向かつて行ったことがある。山間部にはいるところ、周辺にはニカン畑が続いていることもあり、初めて見る風景に山の農地は棚田とはほど遠い記憶となつた。

社会人となり、20年ほど前に石川県庁に勤める機会があつた。職場に輪島の千枚田の保存活動をしている若者がいた。輪島の千枚田は既に、観光資源としての知名度は高いものだったのであるが、彼らの保存活動は、今日で言う、棚田としての多面的機能の発現維持の要素を有していた。この頃から、私の棚田に対する認識が大きく変わったように思つ。

さて、第10回全国棚田サミットに参加して感じたことを一つ述べたい。

2日目に行われた分科会「棚田発・農業観の転換」に参加した。この分科会は、ゲストに山下惣一氏を迎えていたこともあり、予想以上に率直で活発な意見が交わされた。都市住民からは、棚田管理の在り方に関して農家へのクレームが、農家からは、現実的な立場からの答弁が出されるなど、眞に棚田保全の活動が長期継続されるためには避けられない議論が行われたのである。棚田に関して、情緒的でなく地に着いた意識の進化が起きていることを感じたことは嬉しい。

今回、私の妻も参加した。私と同郷の彼女は棚田体験は初めてであったのだが、棚田の素晴らしさを体験したばかりでなく、棚田の維持保全に関する地元の人達の取り組みに驚きと感心しきりであった。棚田サミットの成果の一つかと言えよう。

第10回全国棚田サミットは、大草相知町長と下江鳳来町長の固い握手で幕を閉じた。愛知県鳳来町からは、鞍掛山麓千枚田保存会をはじめ大勢が、黄緑色のおそろいの法被を着て次回サミットをアピールし、印象に残った人も多いであろう。サミット実行のために、すでに鳳来町四谷地区の若者たちで「連ゲストに山下惣一氏を迎えていたこともあり、予想以上に率直で活発な意見が交わされた。都市住民からは、棚田管理の在り方に関して農家へのクレームが、農家からは、現実的な立場からの答弁が出されるなど、眞に棚田保全の活動が長期継続されるためには避けられない議論が行われたのである。棚田に関して、情緒的でなく地に着いた意識の進化が起きていることを感じたことは嬉しい。

2005年、第11回全国棚田サミット開催地は愛知県鳳来町である。日程は、現在9月2日(金)~3日(土)が予定されている。詳細はまだ先にわからないと見えてこないというが、鳳来町のキャラクターフレーズは「緑と水と心のオアシス」。また愛知万博のテーマは「自然の観察」。これらのテーマを踏まえ、テーマを決定したいと鳳来町役場担当者は話している。

ほらいちょう
そこで2006年、第12回は宮崎県日南市での開催だ。最南端での開催、そして日南市のみなさんがサミット開催をかねてから望み、待つてくれているところであります。お伝えしたい。

そして2006年、第12回は宮崎県日南市での開催だ。最南端での開催、そして日南市のみなさんがサミット開催をかねてから望み、待つてくれているところである。全国棚田サミットは年々盛り上がり、人々の心が行き交う素晴らしいサミットとなってきた。開催地域を元気にするだけでなく、日本全国の棚田地域、棚田農家、棚田を愛する人など大勢が集い、元気になるサミットである。こうしたサミットはそうあるものではない。みんなでささやく盛り上げていきたいものだ。

参加者 Voice

私はサミットで第4分科会に参加し、発言もさせていただきました。3時間余りの時間はほとんど4人の課題提供者の発表に費やされ、大切な討論は低調でした。もつと参加者が進んで発言し、意欲

分科会に参加して思う

犬塚 雅敏

全国棚田(千枚田)連絡協議会個人正会員・静岡県

的であるべきと思いました。

分科会発表でも、司会者が多く、分科会のコーディネーターである中島峰広先生が兼ねているのが気になりました。せっかくの分科会です。あり方を次回から一考してほしいと思っています。



次回、2005年は愛知県鳳来町で開催決定！ 2006年は、宮崎県日南市で

参加者 Voice

私は今回初めて棚田サミットへ参加させていただきました。多くの自治体や棚田関係者が参加するこの大会に参加できて本当によかったですと思ひます。

長野県千曲市農林課

齊木 規晃

22世紀にもその先の世紀にも、棚田などの文化遺産そのものが持つ文化的価値を損なうことなく残していくこうとする取り組みが素晴らしいものだと思います。

話などいろいろなお話を聞く中で、棚田を維持する難しさはどこも変わらないのだ
とこつことを実感しました。

参加者 Voice

サミットに参加して、見えてきた我が町

岡山県中央町産業振興課

池上
康夫

私の町には、平成11年に『日本の棚田百選』認定地区一覧の表紙に使つていきました。

0-a 1050 おのれの朋田の現貌は我が町
できました。

ルに到着しました。片道約5時間の長旅となってしまいました。翌日に控えたサミットに胸膨らませながら、海を一望できるホテルで長旅の疲れを癒しました。

第1日目は佐賀県知事による特別講演から参加しました。県知事の講演の中で長野県出向時の棚田との出会いが紹介されていました。私の出身地「千曲市」姨おば

正会員は千曲市のみであり、それに比べて佐賀県は8自治体と圧倒的に多い。このことからもわかるように、佐賀県による棚田に対する保全への取り組みが進んでいると感じるとともに、長野県の取り組みを振り返り、少し残念に思いました。講演の中でもとくに印象に残ったのが、「22世紀に残す佐賀県遺産」制度でした。

田の景色や日本一高い石積みなどを堪能しました。棚田の入口にある交流広場では、地元の方による名産物やもちなどがふるまわれ、あたたかい心遣いに地元の方の優しさを感じました。

全体交流会や二次会では多くの参加者と交流ができ、親交を深めることができました。様々な自治体の取り組みや苦労

今回サミットで感じたこと・参考についた他市町村の事例がたくさんあり、とても勉強になりました。姨捨棚田の取り組みだけでなく、長野県そして全国の棚田の保全活動に少しでもお役に立てるようこれからも精進していきたいと思います。

平成6年に高知県梼原町で第1回全国棚田サミットが開催されて以来はや10年節目の今回は、佐賀県相知町において第10回が開催されました。私の記憶では、第2回の佐賀県西有田町、第6回の浮羽町・星野村の合同開催と、九州では3回目となつてていると思います。

国的にも、最も先進地であり棚田保存等の取組みの盛んな地域であると思います。今回の参加について私の町では、町独自による棚田保存地区選考条例を平成12年に制定し、町内に10地区的棚田保存地区を認定しており、10地区による棚田保存地区連絡協議会を結成して、保存活動を行う中での先進地研修として12人での参加となりました。

私の町には、平成11年に『日本の棚田百選』認定地区一覧の表紙に使っていただいた、すり鉢状の棚田【大坪和西棚田】がありますが、八幡岳の裾野標高1800m付近に広がっている相知町蕨野棚田について、おしようさんのボランティアガイドの説明を聞きながら登っていると、こちらの棚田は天まで届いているかのようにも高くそびえて見えました。「ここが最後の集落です、ここから上の水田の水はきれいな天然水であることから、安全でおいしさを強調して棚田米【蕨野】の名でブランド米として注目されている」と聞かされ、なるほどと納得

40ha1050枚の棚田の規模は我が町の「大坪和西棚田」の42.2ha、850枚と似ているが、頂上から見ると眼下の棚田は、谷あいを蛇行して流れ出た溶岩流の跡が残っているようにも見えました。そこから出た岩石を農閑期を利用して10年の歳月を掛け全ての農家の手間講により築かれた、見事な石積みの石の大きさ、高さ、面積の広いことには圧倒されてしまいました。

相当の高さのある石垣には、足場となる突出した石を組み込んであり、草は手作業により抜き取ることでした。

南川原の高さ 8.5m の石垣は日本で最も高い石垣だそうです。全国の棚田のある市町村に手紙を出し石垣の高さを調査し、8.5m の蕨野棚田が日本一であることを実証した、役場担当者のまさ・熱意には驚き、相知町役場確認したところ 2 年前、当時の係長さんがされたと聞かされました。(→)までは、なかなか出来ません。さすが相知町の職員さんだ、私達も見習わなくてはいけないことだと痛感いたしました。)



蕨野の棚田は5箇所の谷合の傾斜に田んぼが何段も重なって造られています。斜面の下方から上方まで続くその棚田を見上げて眺めていくとその規模の大きさにとても感動します。以前に写真で見たことがあり、棚田の美しさと、8.5mの石垣の高さに驚きましたが、実際に見るとやはりそれ以上に迫力のあるものでした。棚田サミット一日目の棚田ミニウォークの時に石垣の畔を歩きましたが、その高さと畦道の狭さに脚がすくんでがくがくするほどで、やつとのことで渡り終えることができました。なかにはあまりの高さに怖くて渡れず、引き返してくる人もいるほどでした。この畔を歩いて畦ぬりや草刈りなどの農作業をしているのかと思うと、厳しい仕事だと思いました。畦

第5分科会で「農」と「食」を見直して

JA東京むさし
土屋わかな

土屋わかな

サミット2田団の分科会では、宇根豊さんのお話を聞きました。農業観の転換という難しい内容でしたが、その中で、「自然環境（生きものや風景など）は、じつはすべて具体的な百姓仕事によって守られ、育てられ、維持されているのだ」というお話をありました。百姓仕事とは、畦をつくり、維持する仕事（畦ぬり、畦草刈り、田回りなど）です。そして、生きもの指標に基づく環境支払によって、その自然環境を守っていくこうという提案がありました。例えば、田んぼのなかに才

「ご飯粒が袖についたりしたら、今の子供や親は、そんなご飯粒は捨ててしまう。自分たちはご飯一粒でも大事にして食べている。食べ物を落としても少しくらいなら、汚れを払って口に入れたものだ」。ご飯一粒でも大切にそして感謝する心が必要だということをおっしゃっていました。今、目の前にあるご飯一粒から田んぼそして田んぼにすむ生きもの、さらに自然環境へ視野を広げ、日本の「農」「食」を考えしていくことが本当に重要なのだなと実感させられました。

参加者
Voice

越し方式では無く、水口に暗渠水路を設け上からの山水により、冷たい水が水田の水温を下げる工夫など、古くから行っていたと資料に記されていますが、私たちの町では今尚田越し方式により水の確保を行つてゐるところもあります。これが文化の違いであり、蕨野棚田のすばらしさであり偉大な先人達の残した遺産だと思いました。

寸前まで来ています。
米の生産調整により荒廃田が増え、次
は人がいなくなり荒廃田が増え、やがて
は原野化することが時間の問題となつて
います。

近年棚田の持つ多面的機能が見直され
つつある中で、新たな取組みが行われて
きています。今回のサミットに参加して、
思ったことはそれぞれの棚田には固有の
文化歴史があるが、今回ほど棚田を地域
資源・貴重な財産として取上げ棚田保存
に全力で当たつておられる地域は他に例
が無いと思いました。

私達も棚田の保存活動については、ある程度の成果を上げていると自負していましたが、相知町で進めておられる『蕨野棚田』保存の取組みには足元にもよれないくらい偉大さを感じました。

多くの参加者の人達と意見交換でき、全国のすばらしい指導者の人達に出会えたこと等大変意義ある大会でした。

最後になりましたが、第10回全国棚田（千枚田）サミットを大成功に導かれた大草町長さん、畠永課長さんをはじめ関係者の皆様の益々のご活躍をお祈りします。大変お世話になりました。

南川原の高さ8.5mの石垣は日本で最も

寸前まで来ています。

私達も棚田の保存活動については、ある程度の成果を上げていると自負していましたが、相知町で進めておられる『蕨野棚田』保存の取組みには足元にもよれないと感心させられました。

多くの参加者の人達と意見交換でき、全国のすばらしい指導者の人達に出会えたこと等大変意義ある大会でした。

最後になりましたが、第10回全国棚田（千枚田）サミットを大成功に導かれた大草町長さん、富永課長さんをはじめ関係者の皆様の益々のご活躍をお祈りします。大変お世話になりました。

タマジャクシが何匹いるかによつてそれを点数化し、その他様々な生きものを調査し、合計点数50点以上で10aあたり3万円を支払うというものでした。このような環境支払は、自然環境を守っていくための一つの方法だと思います。私たちは何らかの方法で棚田環境保全に協力していきことが必要なのだと思いました。

分科会の会場でお会いした地元の方との会話のなかでこんな話がありました。「ご飯粒が袖についたりしたら、今の子供や親は、そんなご飯粒は捨ててしまう。自分たちはご飯一粒でも大事にして食べている。食べ物を落としても少しくらいなら汚れを払つて口に入れたものだ」。ご飯一粒でも大切にして感謝する心が必要だということをおっしゃっていました。

今、目の前にあるご飯一粒から田んぼそして田んぼにすむ生きもの、さらに自然環境へ視野を広げ、日本の「農」「食」を考えていくことが本当に重要なのだな

棚田トラスト制度に取り組むために

棚田トラスト制度をご存知ですか？

次世代に向けて美しい棚田の景観を残そうと「棚田トラスト制度」が、全国数カ所ではじまっている。これは「棚田オーナー制度」と同様に都市住民の力を得て、棚田保全をしていくこうという仕組みだ。

ちなみに「棚田オーナー制度」は、すでに12年以上の歴史をもち、

全国100箇所以上で展開されるようになった。1992年に「棚田オーナー制度」を全国で最初にはじめた高知県梼原町では、そのなかから定住者が3組誕生するなど多くの実績が生まれている。

「棚田トラスト制度」と何か。

端的にいえば、その地域の棚田の保全策を同時に実行している地域に将来性を伺うことができる。その一つの策として、「棚田トラスト制度」を今回紹介する。

トラストって何？

トラスト(trust)とは、「信託」の意。ここで使う「トラスト」とは、イギリスで発祥したナショナル・トラスト(National Trust)運動からきている。ナショナル・トラストとは——広辞苑によると「歴史的名勝および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト」の略称。自然環境や歴史的環境を保存することを目的に1895年イギリスで発足した民間組織。世界各地に広まった同趣旨の運動をも指す」とある。

いわば、「かけがえのない自然

環境や歴史的環境を保存する」ことを目的とした運動で、具体的には、一般市民から資金を募って土地を買い取つたり(自治体に買い取りを求める場合もある)、あるいは土地所有者から寄贈を受けるなどして、その土地を管理保全し、公開し再生していくこ

うという活動である。

日本の場合、北海道知床や和歌山県天神崎の自然保護運動が有名で、森林などを市民のトラストで買い取り保護されている。日本でもこうしたトラスト団体がいくつか誕生し、1992年

を守りたいと思っている人たちを広く募集して、維持管理費などを支援してもらうというものだ。

棚田保全は、一筋縄ではいかないのはご存知の通り。いくつもそのなかから定住者が3組誕生するなど多くの実績が生まれている。

「協力金」として、「1口1万円／年」を会費とし、特典としては丸山千枚田で収穫された白米を1升(1.5kg)を渡すというもの。そのほか年3～4回の機関誌を送付し、丸山千枚田の状況を知らせている。そして、この協力金でもって丸山千枚田の保全、維持管理を行っているのである。

オーナー制度とは異なり、農作業等への協力などの要請はまったくない。遠くて現地までなかなか行くことができないが、丸山千枚田を守りたいと思う都市住民にとってはありがたいシステムだ。実績は2000年78口、2001年66口、2002年54口、2003年44口、2004年53口(なかには2口以上応援している人もおり、人数は口数と一致しない)。現在はH

Pなどで募集を行う程度という。

問い合わせ、申込：紀和町役場産業課

三重県紀和町丸山千枚田

三重県紀和町では、1999年

丸山千枚田の保全は、この「サ

からサポーター制度(棚田トラスト制度と同様の趣旨)「千枚田を守る会」を発足させている。これ

制度」と併用する形で進められているのが特徴だ。オーナーは毎年約100組、1.3万円で約50口(約50万円)をあわせ、その資金を丸山千枚田保存会(財

紀和町ふるさと公社経由)に払っている仕組みである。

その資金が、丸山千枚田約7haのうち、丸山千枚田保存会の管理部分2.8ha(うちオーナー1.1ha)でかかる経費や労賃等に充てられている。高齢化が進む地域にとって、棚田を保全するには耕作を委託する耕作者へ

の労賃など資金づくりがボインとなることから、紀和町はいち早く資金を確保する仕組みを進めたのである。

スタイルで棚田地域それぞれにおいて、都市住民による支援スタイルをつくりあげてきている。さて、これらを確認してみよう。

「棚田トラスト制度」は独自のスタイルで棚田地域それぞれにおいて、都市住民による支援ス

トで買い物保護されている。Pなどで募集を行う程度という。

島根県柿木村大井谷の棚田

島根県柿木村大井谷の棚田では、1999年にスタートさせた棚田オーナー制度のほかに、2000年に「棚田トラスト制度」を開始した。トラスト制度に参加してもらうことで「農業に対する理解を深めてもらい、棚田保全を支援」してもらうことを目的とし、オーナー制度と違って、農作業は義務づけていない。

東京から福岡県まで61組77口の申し込みでスタートし、2001年は79口、2002年は54口、2003年は32口、2004年27口（22組）という実績である。

トトラスト料金として「1口1万円／年」、1口当たり棚田米5kgが11月上旬に宅配される仕組みになっている。そのほか年2回の「棚田だより」や村広報誌の送付、棚田まつりなど村のイベント案内をしてくれる。

また棚田オーナーの必要が生じた場合は呼びかけがある。料金の使い道として、棚田景観を守るために草刈り経費や花木の植栽経費、棚田の耕作道や水路、

奈良県明日香村

奈良県明日香村には、独自の

トラスト制度がある。それは「すきトラスト」というもの。「すき」とは、稻刈り後のわらを積み上げたわら山のこと。むか

しからの農村風景を守るために、「すき」を残そうというのである。そのため、トラスト会員は、稻刈り、脱穀作業の体験のほか景観保全のためのススキをつくる。

会費は、「3万円／年」で毎年15口募集されている。景観保全にしている人たちは、本当に大井谷の棚田を守りたいという人たちばかりです」と役場担当者は話す。一方、オーナー制度は募集中よりも応募数が多いというが、農家10組で対応しているので、現在の35組以上は顔の見えない関係になってしまふと、数は増やせないのだそうだ。

問・申・柿木村役場産業課
TEL: 0856-79-2213

千葉県鳴川市大山千枚田

NPO法人大山千枚田保存会が2002年から行っている「棚田トラスト制度」は、ほかの地域と少し趣が異なる。「棚田オーナー制度」のように農地を個人に貸し出すのではなく、トラスト会員にはイベント的に開催される各農作業に参加してもらい、共同作業で大山地区全体の棚田を守つていこうというのだ。も

ちろんオーナー制度も実施しており、オーナーは毎年100組以上が「マイ田んぼ」で汗を流している。

トラスト会員は、「1口3万円／年」で募集しており、トラストで保全するシステムを取つていている。

トラスト会員は、「1口3万円／年」で募集しており、トラストで保全するシステムを取つていて

集まつてくる。

そのほか、休耕田で大豆を作

る大きな要因といえる。

問・申・松崎町役場商工観光課

田は、2002年からスタートさせた棚田オーナー制度と同時に「棚田トラスト制度」を立ち上げている。会費は「1口1万円／年」。そして精米5kgが送られるというもの。2004年は31口の申し込みがあった。

TEL: 0558-42-3964

静岡県松崎町石部の棚田

静岡県松崎町の石部地区の棚

田がある場所の名称)の棚田保全と景観保全・自然環境維持復元に理解・賛同し、その活動を支援してくださる方。個人、家族、団体を問わず」となっている。

問・申・松崎町役場商工観光課

TEL: 0558-42-3964

ちなみに明日香村は、オーナー制度の種類も多彩で「棚田オーナー制度」(78組募集)のほかに、

内すべてのオーナー募集総数は約700口にもなる。

明日香村は数多くの歴史的遺産があり、それらと一体的に美しい農村環境が残る村。「農」の宮みで形成された景観美だからこそ、

ち合う力が必要と、都市住民の力を借りる仕組みを用意している。

問・申・(財)明日香村地域振興公社
TEL: 0744-54-9200

制度があり、自分にあつたものが選択できるのもうれしい。村のオーナー「うまし酒オーナー」もあり、「1口2万円」で2000口募集がある。純米大吟醸酒900ml7本もしくは、純米吟醸酒900ml6本+新米5kgのいずれかを選択できる。

そのほか、畠オーナーやみかんの木のオーナー、土つき野菜オーナー、いもほりオーナー、貸農園など村内でさまざまなオーナー制度の種類もある。正会員3000円で会員を数多く巻き込んでいることにある。正会員年会費3000円、贊助会員年会費1000円で会員を募っており、現在、正会員120名、贊助会員390名、

保存会の特徴は、会員に都市住民を数多く巻き込んでいることにある。正会員年会費3000円、贊助会員年会費1000円で会員を募っており、現在、正会員120名、贊助会員390名、

農作業参加を権利として考え、平均して4kg受け取ることができる。それだけでなく、大山千枚田祭など年7回の農作業の日を設け、極力参加してもらうよう呼びかけている。トラスト会員は2002年32口。2003年は55口。2004年は54口。54口とはいっても家族で参加するなど、農作業にはつねに110人ぐらいが

田は、2002年からスタートさせた棚田オーナー制度と同時に「棚田トラスト制度」を立ち上げている。会費は「1口1万円／年」。そして精米5kgが送られるというもの。2004年は31口の申し込みがあった。

問・申・松崎町役場商工観光課

TEL: 0558-42-3964

そのほか、休耕田で大豆を作

れる大きな要因といえる。

問・申・大山千枚田保存会事務局(棚田俱楽部内)

TEL: 0470-99-9050

棚田トラスト制度の可能性を考える

若者パワー④

このコーナーでは、
棚田保全活動をしている
若者たちを紹介します。

岐阜県立恵那農業高等学校

—環境科学科のみなさん—



平成13年より
恵那市にある坂
折の棚田において、
田植えや石垣除
草などの保全活
動を、地元の方々
や恵那市の協力
により実施させ
ていただきました。
その活動の一部
を紹介させてい
ただきます。

3年生が7月に
田の草取りに行
ったときのことです。大変暑い日で
日中35°C位まで
気温が上がり、そ
んな中1時間ほど草取りを行いました。生徒も私もフラフラとなりすっかりばててしまいました。しかし取ることのできた草は意外とわずかで、農家の方々の苦労を少しですが味わうことができました。生徒からは「水田の草取りがあんなに大変だとは思いませんでした。今まで何も考えずにお米を食べていたことが少し恥ずかしくなりました。見えないところで苦労している人がたくさんいて、この棚田が守られていることを知りました。」、その他にも「これからはおばあちゃんの田圃の手伝いをしたい。」というような心温まる感想を生徒から聞くことができうれしく思いました。中学生・高校生にも、逆にそのようなかなりつらい作業をさせることも、農家の方々の重労働を考えると同時に、自分を客観視するにもよい機会になると思います。

3年生は、1年かけて自分のテーマを造り研究を行います。今年度は4人が棚田をテーマに各種調査(水質調査、水生生物調査など)を行い、棚田が豊かな生態系であることを改めて再認識する事ができました。

各種実習以外にもいろいろな活動をさせていただきました。昨年度実施された第9回全国棚田サミットでは、生徒3名が発表させていただき好評を得ることができ、また棚田環境大学の方々とも交流するきっかけができ大変感謝しております。

棚田での実習後、生徒達の多くが「先生、また棚田で行こうよ。」と言ってくれます。自然や文化に触れ、様々な知識を得ると同時に、人の温もりを感じ心のやすらぎを覚えるのだと思います。

今後も継続的に棚田保全活動に取り組んでいきたいと考えてあります。

岐阜県立恵那農業高等学校環境科学科教諭 森本 達雄

「棚田トラスト制度」といつても多様な仕組みが各地域で行
われている。今回紹介できなか
つたが、長野県千曲市も199
6年から、娘捨棚田のオーナー
制度の中に「保全コース」(1口
3万円 玄米または白米20kg)
を設けており、農作業に参加せ
ずに娘捨の保全ができる仕組み
を用意している(千曲市農林課
TEL 026-275-1050)。

しかし案外、「棚田トラスト制
度」という仕組みは知られてい
ない。棚田は「農地」であるが
ゆえ、自然環境を守るような「ト
ラスト」のイメージはなじまな
いからかもしれない。しかし、
景観法の施行や文化財保護法の
改正で、農村景観も文化財とし
て評価するようになった今日。
さらに全国棚田(千枚田)サミ
ットの影響も大きく、「美しい棚
田を守りたい」という都市住民
がどんどん増えている現在。「棚
田の景観を守る=耕作の継続」
という視点で、「この美しい景観
を守りませんか」と広く都市住
民に「棚田トラスト」を呼びか
けても良い時期が来ているので
はないだろうか。

棚田保全がしたくとも、オーナーとなつて通うのはむづかしいという人も多い。同じ町村内の人にも支援したい人もいるのではないか。また外国人にも、日本の棚田の美をアピールし、その景観の保全協力をインター ネットなどで呼びかければ、協力してくれる人は出てくるだろう。もちろん、情報発信に力を注ぐことは必要だ。

そして都市住民サイドも、これを機に各地の「棚田トラスト制度」に参加してはいかがだろ うか。来年度の会員の募集がは じまっているところは多い(2 月末日締め切りのところもあるので早めに確認を)。

また、自分の好きな棚田を保全するため、都市サイドからこの制度を立ち上げるのも一案といえる。もちろん、その地域の棚田を守るために、そこで取れた棚田米を買い続ける。そういう保全も忘れてはならない。

「棚田トラスト制度」を設定したならば、人と人とが出会う、また棚田や農作業にも触れてもうう機会も同時にうまく設けなければならないだろう。棚田の魅力は、やはり「現地」(人や棚田、風景……)なのである。

文責・石井里津子

長崎県外海町で 「案山子コンテスト in 棚田」を開催

そとめちよう



外海町の大中尾棚田は、平成11年7月に『日本棚田百選』の1つに選定され、地域の農家にとってはこのことが大きな励みとなり、おいしい棚田米の生産向上とこの大中尾棚田の景観を壊すことなく次の時代に引き継ぐことを目的に廣山昭作さんらが中心となり、大中尾棚田保全組合を発足させた。

この大中尾棚田保全組合主催で第3回目の「案山子コンテスト in 棚田」を9月26日(日)に開催し、町内外より71体の案山子が棚田中心部の休憩舎一帯にと

ころ狭しと立てられ、小学生の部、中学生の部、一般の部にそれぞれ分かれコンテストが行われた。今年は、アテネオリンピックが開催されたこともあり、それにちなんだ作品が多く出品された。

また、これと同時に稲刈体験も行われ、地域の中学生や一般の参加者など約60名が、黄金色に色づいた稲穂の刈り取り作業を行った。さわやかな秋晴れのもと、参加者は心地よい汗をかきながら農作業を楽しんでいた。

休憩舎付近の駐車場では、地元特産の棚田みそを使つたぶた

汁が参加者全員に振る舞われ会場は多いに賑わつた。また地元の新鮮野菜や田舎まんじゅうなど特産品の販売も行われた。

大中尾棚田保全組合ではこの

事業のほか、農作業に関心を持

ち、農村を理解してもらうため、

次代を担う子供たちを中心に田

植え体験・稻刈体験の受入を年

間を通して行つてゐる。また、

棚田オーナー制度を取り入れ、

農作業をしたくても田畠を持て

ない都市住民を対象に、日常の

耕作管理を受け持ち、年数回の

米作りを体験してもらい、都市

と農村の交流を図つてゐる。

農作業をしたくても田畠を持て

</div